

渦潮電機、「みらい工場」稼働

■第4の生産拠点、今治のフラッグ工場に

渦潮電機は第4の生産拠点となる新工場「みらい工場」を竣工した。来月から本格的に生産ラインを稼働させる。5層構造でオフィスと工場の一体化を図り斬新な設計を取り入れた工場で、竣工後約30年が経った本社工場の生産ラインを刷新、機能を分担し、作業安全や効率化などで生産性向上を図った。船用製品を生産する今治地区のフラッグ工場として、地域の認知向上や若手人材の確保など将来につなげる。4月12日には海運・造船関係者を招いた披露会も予定している。



渦潮電機は来年創業65周年を迎える。新工場建設は既存の本社・大西工場は設置から30年以上が経過していることを踏まえ、ベトナムや大連へも進出を図った2005年に設置を決定し、用地取得に着手。工場レイアウトの検討を進めてきた。今年1月29日に竣工し、営業など一部移設した部門を含むオフィス部分が今月15日から業務開始。3月から工場も本格稼働する。

「みらい工場」は国内の本社、大阪機電(陸上)、ベトナム工場に続く4番目の生産拠点となり、本社に次ぐ船用の主力拠点となる。敷地面積は3万1000㎡で、底辺が108m、2辺が98.6mの三角形(扇形)の形状。1階は3列(95m、65m、45m)からなるパネル工場で、大型から中型の船用の監視盤などが中心。2階は小型製品を扱う工場、3～5階がオフィス棟となる。人員は約半数に当たる240人が異動。既存

の工場には集配電盤やスターター、設計部門などが残り、2工場で生産品目を分担する。

高操業の状況では安全通路の確保やクレーン高さの問題、移動スペースの確保などが課題となったが、新工場では生産ラインが整理され、効率が高められた。今後は外注分も取り込み内作率を高める方針。海外生産分に関しては、コストが低減できる製品は戻さず、従来どおり、胴体の加工など、海外に移管しているものは続けていく。

新工場は国道沿いに設置することで、地域の子供に夢を与えるよう、今後、イメージ向上を図っていく目的も大きい。また、工場棟とオフィスを一緒にするコンセプトは、大規模工場としては新しい取り組み。オフィスは工場の雰囲気そのまま持ち込んだデザインにし、配線や配管が見えても良い形にレイアウト

を工夫するなど、嗜好を凝らした。

コンセプトを「森の扇船」として設計した。要(かなめ)から広がる左右3枚の屋根を合わせてできた扇状の大屋根で、要と翼の先端の両輪で留める形は、各業務部門の自立と連結を表現している。ひとつ屋根の下でスタッフが一緒になり仕事をする、未来の船のイメージ。森林をバックに、周囲の高低差も利用した造りになっている。

渦潮電機は新工場稼働に併行し、組織体制も見直した。営業と開発に密接にかかわるマーケティング本部で、技術系の人員を厚くした。技術メンバーを充実させ、受注時の設計対応機能を高めた体制とし、収益につながるよう、マーケティング部門を強化、受注を取れる体制にした。今後実施する開発に関し、ロードマップを作成。次期商船への適用を視野に、開発を進めていく。

シンガポール海事展APM2010で10会議

3月24～26日にシンガポールで開催される海事展「アジア・パシフィック・マリタイム(APM)2010」では、船舶金融や環境などテーマごとに計10のセミナーが開催され

る予定だ。

APMは隔年開催の海事展で、シンガポール・エキスポで開催される。メーカーなど900社が出展する予定。同時開催のセミナーは、

▷アジア海運業▷船舶金融▷アジアの海事法▷中国造船業▷日本造船業▷インド造船業▷グリーンシップ▷タンカー▷通信・電子機器▷推進機・補機—の10テーマごとに開催される予定。